

一 般 演 題 抄 錄

10. 臨床材料より分離された嫌気性菌の菌種別 分離頻度および薬剤感受性について

山口逸弘 三好寛子 熊ノ郷玉緒
秋田玉美 寺山由里 久保修一
飯森真幸 山住俊晃* 中村吉伸*
尾鼻康朗* 古田格* 大場康寛*

近畿大学医学部附属病院中央臨床検査部・*同医学部臨床病理学教室

目 的

嫌気性菌感染症はクロストリジウム属の一部を除いて日和見菌によるものであり immunocompromised host における内因性起炎菌とされている。今回、我々は、当院において過去5年間に各種臨床材料より分離した嫌気性菌の菌種別分離状況および薬剤感受性成績について報告する。

対象および方法

1986年から1990年までの5年間に当院臨床材料より分離した嫌気性菌1396株を対象にして菌種別分離頻度および材料別分離頻度について検討を行った。そのうち843株については、昭和1濃度法による各菌種の感受性率を、また、*Bacteroides fragilis* group 54株については、セプター・システム (BBL) を用いた微量液体希釈法により MIC を測定した。

結 果

臨床材料より分離したグラム陰性菌のうち、グラム陰性桿菌は715株 (51.2%) で全体の半数以上を占め、その中で、*Bacteroides fragilis* は185株 (13.3%) で最も高頻度に分離された。グラム陽性菌検出は、グラム陽性球菌が19.1%、無芽胞グラム陽性桿菌が18.1%、*Clostridium* 属は8.7%であった。

検査材料別分離頻度は、腹部材料のグラム陰性桿菌および *Clostridium* 属が高率を示し、逆に、グラム陽性球菌および無芽胞グラム陽性桿菌の分離頻度は低い傾向であった。また、呼吸器材料ではグラム陰性球菌の検出が他の材料に比較して高い傾向がみられた。

同一検体の複数菌種分離例は41.2%であり、検査材料別に大きな差は認められなかった。

昭和1濃度ディスク法での薬剤感受性成績で *Bacteroides* 属にβラクタム剤の耐性化がみられ、これらの耐性化は *Bacteroides fragilis* において顕著であった。

グラム陽性菌の薬剤感受性検査では、*Clostridium difficile* の一部の薬剤において耐性傾向が認められたが、他の菌種については著しい耐性化は認められなかった。

Bacteroides fragilis group 54株の各種薬剤の MIC 成績では、CP、TC の MIC 値が比較的低値であったが、他の薬剤では MIC 値が高値であった。

ま と め

過去5年間の臨床材料から高率に分離された *Bacteroides fragilis* group についての検討成績から、特に薬剤耐性の強い *Bacteroides fragilis* は嫌気性菌感染症における注意すべき菌種と考え、迅速な同定と薬剤感受性検査が必要と考える。